

高知大学 病院 ニュース

〔編集〕
 高知大学病院ニュース
 編集委員会
 委員長 佐野 栄紀
 〔発行人〕
 高知大学医学部附属病院
 病院長 杉浦 哲朗

今年度の取り組み

高知大学医学部附属病院長 杉浦 哲朗

この度、高知大学医学部附属病院長を再任させていただきます、ここに謹んでご挨拶申し上げます。職員の皆様には忙しい臨床業務に追われながらも良質で効率的な医療の提供に尽力いただき感謝申し上げます。また、医学部附属病院開院30周年記念事業におきましては多大なご協力を賜り誠にありがとうございました。

平成23年3月11日、宮城県牡鹿半島沖を震源として発生した東北地方太平洋沖地震は、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的被害をもたらしました。本院はこの震災による被害の大きさに鑑み、医師、看護師、医療従事者及び事務職員などで構成する医療支援チームを編成し、大学が一丸となって支援を行いました。平成23年11月には災害時の救急医療体制を構築する人材の育成や研究を目的とする災害・救急医療学講座(高知県を寄附者とする寄附講座)が医学部に新設され、大災害時には本院が県民医療を担う拠点となるための体制作りが進められています。さらに、新病棟には屋上ヘリポートを設置し、緊急時に車いすやベッド移送もできるスロープ式の階段も併設するなど、最新の設備や工夫を凝らして大規模災害対策を行っています。

「こはすキッズ」及び「レジデントハウス南風(みなかぜ)」

今年度から本格的に始まる附属病院再開発に伴い、病棟北に免震構造の保育所「こはすキッズ」をオープンいたしました。広さ約330㎡、定員45名の快適な空間であり、職員の子育て支援やワークライフバランス実現の手助けになれることを願っております。

教育研修施設を併設した研修医宿舎「レジデントハウス南風(みなかぜ)」は「高知が一番のキャリア形成サポート県」実現に向け平成24年3月に完成しました。鉄筋コンクリート5階建てで、1階が教育研修施設、2～5階が研修医の居室となっています。1階の教育研修施設にはスキルラボ及び低侵襲手術教育・トレーニングセンターがあります。スキルラボは、医学部生の基本的臨床技能実習から研修医の専門技能トレーニングまで対応し、高機能生体シミュレーターを用いた急性期医療初期対応トレーニングを別室

からモニタリングできる設備も備えています。研修医の居室は46室あり、1室あたり25㎡と快適な居住環境が整備されていますので、多くの研修医が本施設を利用し、優れた医療人として巣立ってくれることを願っています。

新病棟増築工事

平成23年度予算において認められました本院の再開発がいよいよ本格的にスタートいたします。第1ステージの新病棟増築工事では平成26年11月完成を目指して建物のみならず、設備・医療機器の充実を図ります。新病棟は患者さんの療養環境改善を通して患者サービスの向上につながるだけでなく、緑地や太陽光発電を含めエコロジーにも配慮した工夫を取り入れています。また、高知県民の最後の砦に相応しいロボット手術も含め最先端技術を駆使した手術数の増加を期待しています。本再開発によって、より「安心」と「信頼」を得られる患者中心の医療を提供でき、地域に貢献できる病院へと更に発展していくことが期待されます。

本年4月より手術料の引き上げ、内科的専門性の高い技術の評価、感染防止対策の評価、チーム医療の推進、先進医療の保険導入そして新規特定保険医療材料等にかかる技術料の新設などの診療報酬が改訂されました。本院の運営上でも大いに役立つものも多く、積極的に取り入れて行きたいと考えています。一方、7:1入院基本料算定要件の見直しなど、この2年間に改善しなければならない課題もあります。今後とも医療を取り巻く環境の変化を的確に捉えていきたいと考えておりますので、職員の皆様のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

◆ 新病棟工事ほか概略工程

H24	H25	H26
4 6 12	6 12	6 12
新病棟工事		11/28 竣工予定
新RI病棟工事		既設RI病棟撤去工事
渡り廊下工事		渡り廊下工事

就任のご挨拶



先端医療学推進センター
名誉センター長

相良 祐輔

名誉センター長に就任いたしまして、おおよそ8ヶ月経過いたしました。この間、医学部の教職員の皆様方にも、医学部という組織においても、また国立大学法人高知大学という機構にも、先端医療学推進センターの存在意義の大きいことが浮かび上がる事態の推移がありました。そこで、このページをお借りして、今申し上げたことを、経緯をふまえながら、考えてみたいと思います。

国立大学法人化される以前から、高知医科大学では、これを予測し、附属病院5カ年計画を立てていたおかげで、法人化で求められた運営と経営の効率化に、医学部、附属病院ともに、大きな支障がなく、十分に対応できました。

法人化後、今日に至るまで求められています「特化される大学機能」、「大学の個性化」に十分留意しながら、財源難の我が国の現状をもあわせ考え、単なる病院再開発ではなく、医学部と附属病院とを個性化、特化させうる再開発として、医学部先端医療学推進センターを創設し、これを附属病院とあわせた再開発事業としました。

先端医療学推進センター構想は、国税によって賄われる国立大学法人への、日本国民の負託に応えながら、地域の大学らしいユニークな個性に拘りつつ、進化する医学部を創造することを、基本哲学として考えたのです。

本年5月4日、国家戦略会議の大学改革案で、国立大学の競争力強化と運営の効率化とを目的に、一法人複数大学の制度改革が考えられていると報じられました。このことは、私達は、既に何年も前から予測してきていることでもあります。どのような制度改革であろうとも、基本に、創設の哲学を忘れられずに、先端医療学推進センター機能が、よく発揮されている限り、本学医学部での対応策立案は、容易にできます。

教職員それぞれが、誇りと伝統を意識して、その時々、正しく対応しさえすればよい、唯それだけのことであります。

その意味で、高知医科大学以来の伝統のもと、医学部のますますの発展に、お手伝いいたしたいと考えております。

就任のご挨拶



三つの使命

医学科長 本家 孝一

今年度から医学科長を拝命いたしました。脇口宏前医学部長が学長に就任され、後継の橋本良明新医学部長の指導の下、KMS丸は新たに船出しました。私は航海士として、ときには機関士として、船長を支えて安全で着実な航海に努めます。

医学科には三つの使命があります。一つ目は、元気な若手医師を育成すること。二つ目は、最先端医療を開発して社会に還元すること。三つ目は、地域医療への貢献です。

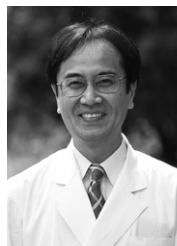
毎年、田植えと時期同じくして新入生が入学してきますが、黄金色の稲穂を蓄えた医師に育つには時間がかかり忍耐が要ります。しびれをきりして手をかけ過ぎるとうまく育ちません。個々の学生の力を信じて静かに、丁寧に見守りたいと思います。

本学における先端医療開発研究拠点として、平成21年に先端医療学推進センターが開設されました。同センターでは、社会ニーズの強いがんや再生医療や医療機器に関するイノベティブな研究や、高度なICTリテラシー(コンピュータやネットワークを活用できる知識・技術)を駆使する情報医療学の開拓を推進し、実際の臨床医療に応用される研究成果が産まれています。平成23年度から医学科の正課科目として『先端医療学コース』がスタートし、学生、教員ともどもから活気づいてきたと好評を得ていますので、この路線を伸ばしたいと思います。

高知県は広い山間地を有し高齢化先進県でもあることから、地域連携型医療体制の構築が急がれます。このため、平成19年に高知県からの寄附により家庭医療学講座が開設され、県と手を取り合いながら課題解決に取り組んでいただきました。年々、地域医療に対する学生の関心が高まってきているのが実感されます。第一期の寄附期間が終わりましたが、幸い、継続していただけることが決まり安堵しています。平成23年に同じく高知県からの寄附による講座として開設されました災害・救急医療学講座は、今後30年以内に70%の確率で起こると予想される東南海地震、南海地震に備えた体制づくりに着手しています。附属病院再開でも地域医療への対応が中心課題に据えられ、地域医療拠点病院として機能強化が益々重要になってくるでしょう。

このように、課題は山積しておりますが、一歩ずつでも解決に向け前向きに邁進していく所存ですので、皆様にはご支援ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

新任のご挨拶



小児思春期医学講座

小児科 藤枝 幹也

4月1日付けで高知大学医学部小児思春期医学講座(小児科)の教授を拝命しました。旧高知医科大学を卒業後すぐに当講座に入局し、小児科一般、感染症、小児腎臓病、膠原病などを中心に診療に携わってきました。

少子高齢化で子どもの人口は減少していますが、求められる医療水準は上昇しており、小児科医の必要性はむしろ高まっていると思います。同時に診療報酬の改正、行政の取り組みなどで小児科医を守ろうとする動きもあります。このような状況下で今後、私が目指している方向は以下のとおりです。

学生教育では、学生と教員とが近い関係であることが重要と考えます。学生が主体的に行動・勉強できる形で双方向の議論を通して、彼らの研究と発表を推進していきます。

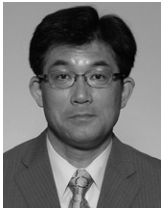
初期研修医は指導医とのマンツーマン体制で、後期研修医はグループ診療の一スタッフとして上級医とともに患者診療に携わっていただき、講座内の各専門医や関係部署との情報共有と連携強化を図りながら医療を行うことで、小児医療を学んでいただきます。

小児医療は総合医療であるため、各専門分野の充実と専門医養成のために、国内外の専門病院・研究室での研修をこれまで以上に推進していくと同時に共同研究も展開していきます。そして、高知県における小児医療の質向上に努力していきます。

大学は、新しい知見を創造していく場所でもありますので、すべての医局員、同門医師が広い社会常識と深い医学知識を習得し、人間(子ども)に対する鋭敏なセンサーを持ち合わせることができるよう力を注いでいきたいと思っています。

以上のような方向性を実現するために、大学内の関係各部署の方々、地域拠点病院や各地域の先生方のご理解、ご指導、ご支援を賜りたいと思います。何卒、よろしくお願い申し上げます。

新任の挨拶



医学部・病院事務部長

佐藤 宏通

平成24年4月1日付けの異動で、徳島大学から赴任してまいりました。医学部・病院事務部長の佐藤です。出身は、縁結びの神様で有名な「出雲大社」があります島根県出雲市です。出雲の人間は、出雲大社

の影響からか「縁」をととても大切にすることが多く、人と人の縁、人と仕事(職場)との縁、人と地域との縁など、昔からよく言われております「これ何かの縁」このことばに結び付けることが多いのです。

私は、これまで出身の島根大学(医科大学を含む。)に始まり、大分大学(医科大学を含む。)、徳島大学で勤務してきました。そして、今回高知大学にお世話になることとなりましたが、それぞれの大学で勤務することになったのも、何かの縁だと思っています。そして、それぞれの勤務地で得た人とのつながり、仕事(大学)とのつながり、地域とのつながりは、私にとって「縁」がもたらしてくれた大切な財産となっています。高知でも新たな財産を作るために、私からもかわりを持つよう努力しますが、皆さんからも積極的に声をかけていただき、縁を深めてもらえればと思っています。

次に、私の好きな言葉について少し触れさせていただきます。私の好きな言葉、それは「情けは人のためならず」です。元々の意味は、「情けは人のためではなく、いずれは自分に返ってくるから、誰にでも親切にしておいた方がいい」ということで、「損得勘定の言葉」と思われる方も多いようですが、私はそうは思っていません。一人ひとりが仲間や周りの人達のために行動し、それが次々と数珠つなぎのように広がっていけば、職場環境などが良好なものになり、思いもよらない良い効果を与えてくれると考えています。そして、その副産物として自分にも返ってくるものもある、と幅広の考えかもしれませんが、そのように思っていますし、そういった気持で業務に取り組みたいと考えています。

これから先、大学に求められるものは益々多様化するでしょう。その一方で、大学に来る予算は厳しさを増し、今後も目減りすることでしょう。病院系に勤務する私のような職員にとって、医療従事者の方と協働し病院の収入を増やすことはとても重要な使命となっています。また、若手・中堅を問わず、職員のキャリアをいかに積ませるのかといったことは、大学の質の向上にもつながる重要な課題です。

高知大学に関しても部長という職位においても新米ですが、ここに書いたような意識を持ちながら、課題などに取り組み高知大学の発展に貢献したいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。



総務企画課長

若狭 忠司

平成24年4月1日付けで、医事課長から総務企画課長に異動になりました。医事課では、病院長のもとで病院業務を中心に社会ニーズに呼応した機能・運営強化等を目標に、皆様方のご協力を得て頑張っております。総務企画課は、統合前の庶務課時代に経験しておりますが、現在の業務は各キャンパスにおける事務の一元化のため事務組織の改編がなされ、「総務」、「人事」、「地域医療支援」、「研究推進事業の活動支援」等を担当し、学内及び学外の連携を強化するとともに、より効率的な業務の遂行に努めております。

また、今年度からは新病棟の建設が始まり病院再開発が本格化しておりますが、医学部の再開発計画等についても、学部長、学系長、病院長のもとで皆が一丸となって取り組んでいきたいと思っておりますので、皆様方のご指導、ご協力をよろしくお願いいたします。



医事課長

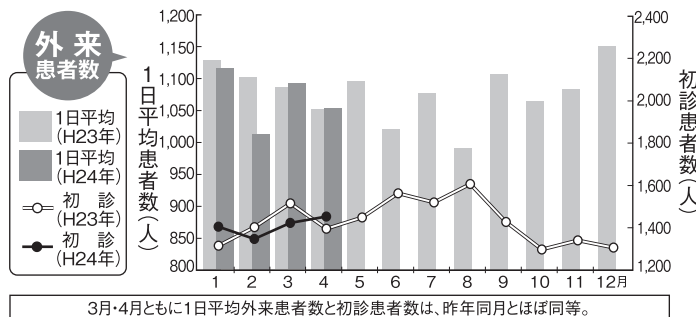
都築 泰仁

昭和56年4月に高知医科大学に採用され、初めての配属が医事課でした。やがて10月の開院を迎え、忙しいながらもやりがいのある業務を任せられ充実した20代を過ごしました。その後も朝倉キャンパスで2年間過ごした以外は、岡豊キャンパスで医学部の業務に携わることができました。現在の高知大学医学部附属病院は、国家財政の窮乏や医師の偏在など困難な環境のなかで、構成員の努力により、患者さんの満足度、地域への貢献度等は高いレベルで維持されていると思います。

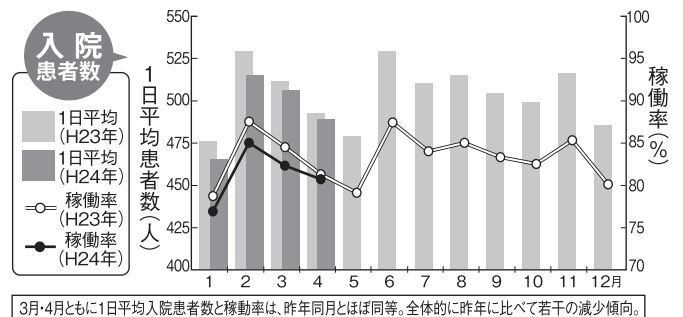
今年から、本格的な病院再開発が始まり、さらに高機能でサービスの充実した病院を目指す新たなスタートに、30年前と同じ医事課で立ち会えることに喜びとともに責任の重さを感じます。

今後も微力ながら与えられた職責を精一杯果たしたいと思っておりますので、ご指導の程、よろしくお願いいたします。

診療状況



3月・4月ともに1日平均外来患者数と初診患者数は、昨年同月とほぼ同等。



3月・4月ともに1日平均入院患者数と稼働率は、昨年同月とほぼ同等。全体的に昨年に比べて若干の減少傾向。

編集後記

大学病院アミニティ

多くの地方大学同様、高知大学も卒業生を母校に確保するには苦勞している。学生がたとえ他県出身でも母校が高知大学ならば、医師として働き甲斐があれば高知にとどまるのではないかな。そのモチベーションの裏付けとして、若い人たちの生活の質が十分担保されるような「アミニティ」の充実も留意すべき要素だと思う。高齢化が著しい高知県にあって岡豊地域は1000人近い若い人口が密集し、そのため平均年齢は周辺郡部に比べピンポイントで低下しているはずである。これだけの若い層

しかも知的レベル所得レベルも高い消費者が集中しているのなら、その活発な知力体力、経済活動をあてに大学病院の周りにショッピングセンター、スポーツクラブ、シネマコンプレックス、深夜まで営業するレストラン、居酒屋などが展開してしかるべきかと思う。また、待機患者、患者家族、国内外からの医療関係者および研究者が利用出来るホテルなども併設しちょっとした大学前シティができて良いのではないかな。しかし、これらの計画は地元政財界の算盤や行政の壁などにより元来画餅ということらしいが、創設30年たっても地域の風景がほとんど変わらないというのも不思議だ。(文責:佐野栄紀)